

特100

477

叢

積

化粧品製造法

實業研究會編

發行所 千葉縣博報館

書

~~270
659~~

0m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^{18m} 11 12 13 14 15

始



47100
477

化粧品製造法

實業研究會 編

緒言

今の世、生存競走に於て大勝利を得んと欲すれば、先づ常に實際場裡に於て、巧に人を左右する腕前がなくてはならぬ。智識や辯舌が如何に衆人にすぐれてゐても、蓬なす髪を打ち振り、皮膚は垢に埋もれ、齒は穢物附着して色を失ひ、「惡臭紛々」として身體より發するが如き、有概で

化粧品製造法

上



は、到底文明の交際場裡に立つ事が出来ない、であるから常に湯に浴し髪を梳り、化粧するのは決して虚飾でない、何れにせよ化粧品は實に文明の社會に欠くべからざる必需品である、試に現今と十年否數年以前との使用量を示したなら、何人も其需要の増加せるに驚くであらう、過去が此通りであるから明かに將來を推察する事が出来る、あゝ誠に有望なるは化粧品の製造業である、化粧品は警察署の許可で製造販賣する事が出来るのであるから、就職難を叫ぶ人々は速にこの有望なる製造業に従事せられん事を望みます。

第一章 白粉

是まで我國で用ひられてゐた白粉は、鉛白に澱粉及び麝香などを混和して調製した者でした、然し鉛を含有せる白粉を永い間使用してあると、遂には皮膚の色を悪くし、『おしろいやけ』と申します暗褐色の班點を生ずるに至りますから、近頃では世人が鉛分を含有してある白粉を嫌ふ様になり、従つて鉛分を含有せぬ白粉を、だんく〜と製造する様になりました、これからその調製法を記しましょう。

○貴婦人用白粉の製法

酸化亞鉛

四十瓦

ウエネタ滑石

七十瓦

澱粉

六十瓦

橙花油

四滴

化粧品製造法

薔薇油

八滴

右の割合を以て研和して製造するのです。

○貴婦人用肉色白粉の製法

貴婦人用白粉 三白瓦

カルミン

一瓦

右の割合を以て調製するのです。

○佛國『ヴェルレーチン』白粉の製法

酸化亞鉛

一瓦

小麥澱粉

三瓦

オルリス根粉末 一瓦

右の割合を以て製造するのです。

化粧品製造法

○すみれ白粉の製法

澱粉

六百瓦

オルリス根粒末

百瓦

ヘルガモント油

一升

檸檬油

二瓦

丁香油

一瓦

右の割合を以て製造するのです。

○薔薇白粉の製法

澱粉

十二「キログラム」

薔薇油

三瓦

白檀油

三瓦

右の割合にて混和して製造するのです。

○練白粉の製法

上等炭酸鉛	百瓦	天花粉	二十五瓦
硼酸	三瓦	ワリニン丁幾	五瓦
龍腦	三瓦	麝香	少量

以上の六品を混和し、これに少量の麝香を混じ、更に『グリッスリン』と『アルコール』を加へ、適宜の稠度に練りて製す。

○水白粉の製法

鹽基性硝酸蒼鉛 五百瓦 橙花水、薔薇水 各一『リットル』

右の割合にて混合して製するのです、但し使用の節は振盪することを忘

れてはならぬ。

○白色劑の製法

硼酸	七瓦	橙花水	六十瓦
薔薇水	五十瓦	リスリン	三十瓦
蒸溜水	百二十瓦		

右の割合を以て調製するのです。

○肌膚艶美液の製法

炭酸カリウム	百瓦	橙花水	一『リットル』
薔薇水	二『リットル』	偲里設林	五百瓦

右の割合を以て混和し、これに安息香丁幾を加へて、乳濁色を呈せむしべし。

第二章 香水

香水は世界各國が、日を追ふて珍品を製出し、我が國だけでもその品數は列擧するに、暇のない程澤山あ。ます、これからその調合法を述べる前に香水製法について必要な事項を、二三記して置きましょう。

○久しく貯藏したる越幾斯を以て製造したる香水は、香氣數日にして調和すれども、新らしき越幾斯を使用する時は、數十日を経れば、配合せる香料個々の香氣を放つものなり。

○越幾斯を配合して香水を製するには、硝子瓶中に充滿せしめ、暗冷の個處に靜置すべし。

○香水は澄明なるをよしとす、されど樹脂より製造したる越幾斯を使用する時は混濁を呈する故、そのまゝ數週間靜置して、その上清を取るべし。

○香水調製に使用する瓶、又は販賣用の硝子瓶は充分掃除し、水分なき様に乾燥して使用すべし。

諺にも『賣り物に花を飾れ』と云ふにあらずや。

○白薔薇香水の製法

白薔薇油 二瓦 椿油 百瓦
 ホワイトオイル 百五瓦

右の割合を以て混和して製造するのです。

○櫻香水の製法

林檎油 十二瓦 枸橼油 十二瓦
 苦扁桃油 數滴 酒精 一「リットル」

右の割合を以て混和して製造するのです。

○水仙香水の製法

壽花越幾斯 八「リットル」 月下香越幾斯 十二「リットル」

蘇合香越幾斯 一「リットル」 百露越幾斯 一「リットル」

右の割合にて製するのです。

○丁香々水の製法

丁香油 五十瓦 酒精 六「リットル」

右の割合を以て丁香油を酒精に溶解して製するものです。

○麝香々水の製法

アンブラ越幾斯 二「リットル」 麝香越幾斯 四「リットル」
 薔薇越幾斯 一「リットル」

右の割合を以て混和して製造するのです。

○日本香水の製法

「イエラッ」越幾斯

「バチエリ」越幾斯

白檀越幾斯

「ウエルヘナ」越幾斯

薔薇越幾斯

各二「リートル」

「ウエチウエル」越幾斯

一「リートル」

右の割合を以て混和して製するのです。

第三章 香 油

○薔薇香油の製法

薔薇油

一瓦

「ケラニエム」油

一瓦

橙花油

數滴

「ヘルガモット」油

五瓦

胡麻油 二百五十瓦

蓖麻子油

五瓦

右の割合を以て練和して製造するのです、これは最も上等の品であります。

白薔薇油

一瓦

ホワイトオイル

六十三瓦

椿油

六十瓦

右の割合で製造したものは普通品であります。

○グリスリン香油の製法

精製「グリスリン」 三百八十瓦

酒精

百二十五瓦

蜜様油

八瓦

桃花油

一瓦

『ジャポラン』丁幾

二瓦

扁桃油

數滴

右の中、各種の芳香油を『アルコホル』及び丁幾を以て溶解し、『グリッソリン』を混じて攪拌し、數時間放置すべし。

○禿頭豫防の香油製法

酒精一『オンス』中に芫菁の細末一瓦を浸し、時々攪拌して二週間程経たる後、これを濾過し、その液十分に冷豚脂九十分を加へて練り合はせ、『ヘルガモット』及びその他の、香油少量を加へて製す。

第四章 コスメチック

『コスメチック』は頭髪や鬚髯の化粧に使用するもので、殆んど我が國の『鬢附』に似てゐる、固形の芳香ある脂である。

○花香『コスメチック』の製法

豚脂五百瓦、安息香脂二百五十瓦、『カ、オ』油二百五十瓦の割合を以てよく溶かし、これを容器のまゝ冷水に入れて冷却せしめ、凝結するまで攪拌し、更に『ヤスミン』脂肪油三十瓦、薔薇油十五滴、『ベルガモット』油五滴、『イランイラン』二滴、橙花油二滴、『イリス』油一滴、『ヘリオトロピン』半瓦、『クマリン』少量、葉緑色素半瓦を混和して製造するのです。

○鬚髯の製法

精製白蠟	三百瓦	橄欖油石鹼	三百瓦
薔薇香脂	六十瓦	丁香油	一瓦
檸檬油	二瓦		

右の配合を以て製造するのです、先づ白蠟を低き温度を以て溶解し、これに石鹼その他の香料を混和し、型に入れて棒状とするのです。

第五章 齒 磨

人と對話するに當つて第一に眼につくのは齒である、ですから齒牙は最も清麗にせねばなりません、殊に齒を損ずる時は、食物を充分にかむ事

が出来なくなる故、胃腸を害し大に健康を破るに至るのである、でありますから齒磨きは化粧品としても、衛生品としても、一日も缺くべからざる必要品で、需要の多いのは云ふまでもない事であります、齒磨の第一の原料は沈澱炭酸石灰であります、沈澱炭酸石灰は石灰水に炭酸曹達を混合し、その沈澱物を濾過して製するのです、これからその調製法をのべましょう。

○花王散齒磨の製法

沈澱炭酸石灰	二百瓦	澱粉	五百瓦
鹽酸加里	五十瓦	龍腦	七瓦

「丁子」 五瓦 薔薇油 少量
 右の割合を以てよく研和し、本紅又は「カルミン」液を以て、桃色に着色すべし。

○樟腦齒磨の製法

樟腦一瓦を依的兒二瓦に溶解し、これに輕石末二瓦を加へて乾燥し、更に炭酸石灰三十五瓦、炭酸「マグネシウム」六瓦、乳糖五瓦を加へて製造するのです。

○紫地丁練齒磨の製法

沈澱炭酸石灰 五瓦 「オルタス」根粉末 一瓦

乳糖 一瓦 烏賊骨粉末 半瓦
 紫地丁精 適宜

右の割合を以て製造するのです。

第六章 口中用香水

口中香水は含嗽水又は齒牙丁幾とも云ひ、使用法はコップに微温湯を盛りてこれに香水をたらし、齒磨にて口中を清めたる後、これを口中に含みて吐き出すので、頗る爽快を覚えしむるものである、齒牙を強健にし口中の惡臭を去る効能があるから、常に交際場裡に立つ人々は非常に愛用するのである。

『オルリス』丁幾、薔薇精、『アルコール』、以上の三品を各々、一『リートル』づゝ混和し、更に適宜の扁桃油を加へて製す。又法
『グラニウム』越幾斯三『リートル』、薔薇花越幾斯一『リートル』、『アルコール』二『リートル』の割合にて製す。

○香 瑩 水

苦扁桃油	二五『グラム』	薔薇水	五『リートル』
橙花油	一〇『グラム』	酒 精	五『リートル』
『イリス』根越幾斯	五『リートル』		

右の割合にて調製するのです。

○『サルチール』酸歯牙丁幾

サルチール酸	二十五『グラム』	薄荷油	一『グラム』
橙花水	一『リートル』	水	一『リートル』

以上の割合で混合して製造するのです、使用は毎食後がよろしい。

第七章 毛生劑と染毛劑

毛の薄きを憂ふる人や、あるべき處に毛なくして心を痛むる人、また中年にして白雪を呈する頭髮に苦慮する人が頗る多いから、毛生劑や造毛劑は實に缺くべからざる必要品である、これからその製法を述べよう。

○毛髮生育劑の製法

安息香丁幾、芫菁丁幾、『ベルガモット』油、僱里設林、酒精、以上各々五瓦づゝ、石炭酸少量

右の割合にて混合して製するのです。使用法は薬液を塗抹する前に數回毛楊子を以て局斯を摩擦したがい。

○染毛劑の製法

煨製石灰、煨性『マグネシヤ』、各々二百五十五瓦づゝ

酸化鉛 一『キログラム』

右の割合にて研和して製するのです。

○白髮染油の製法

『ワスリン』五十五瓦、白蠟十二瓦、硝酸銀一瓦の割合にて重煎で溶かし炭酸鐵を加へて黒色をつけるのです。

第八章 毛髮洗滌劑

毛髮の美なるは婦人の最も誇りとする處である、劣等な石鹼で毛髮を洗ひますと光澤を失ふ事がありますから、近頃では毛髮洗滌劑を使用するお方が、なか／＼多くなりました、左に二三の製法を述べましょう。

○洗髮液の製法

迷迭香精 一『オンス』 僱里設林 一『オンス』

硼砂 一『グラム』 蒸溜水 十四『オンス』

以上の割合で混和調製するのです、使用法は一乃至二食匙程を毛髪につけてよく摩擦し、のち微温湯で洗ふのです。

○花の水

月下香	幾斯	百瓦	橙花	幾斯	百瓦
ヤスミン	越幾斯	百瓦	ワニラ	越幾斯	五十瓦
アカシア	越幾斯	百瓦	トンカ豆	越幾斯	五十瓦
薔薇水	一「リールドル」		酒精	一「リールドル」	

右の割合にて混合して製するのです。

○石鹼髪洗水

石鹼六瓦に「サフラン」一瓦と適宜の蒸溜水を加へ、火にかけて溶解しこれに薔薇水一「リールドル」と酒精六十瓦を混じて振盪し、二三日そのままに置きて上清を取るのです。

第九章 香粉

香粉は香氣の永く變らぬ種々の香料を撰びて細粉とし、絹又は縹子の袋に入れて匂袋とし、或は簞笥長持などに入れて衣服に芳香を附し、ハンカチーフ、書簡袋等に塗抹して匂ひ入りを製するなど頗る貴重なる化粧品である。

○薔薇香粉の製法

薔薇葉粉末

二十瓦

白檀粉末

八瓦

『ローヂウス』木粉末 十五瓦

『オルリス』根粉末 十五瓦

『ベンゾイン』護謨粉末 四瓦

蘇防粉末 一瓦

以上の割合にて混和し、これに薔薇油數滴を加へて製するのです。

○麝香粉の製法

『ローヂウム』木粉末 二瓦

『ベンゾイン』護謨粉末 一瓦

『オルリス』根粉末 十五瓦

麝香粉末 一瓦

『ヴァニラ』根粉末 二瓦

右の配合にて調合して製するのです。

○錫蘭香粉の製法

肉荳蔻被末

十三瓦

『パチユル』葉末

十六瓦

『ウニチウエル』葉末 二十瓦

薄荷油

二瓦

登皮油

一瓦

右の割合にて製するのです。

第十章 化粧紅

紅は紅草の花から製するのです、その製法を簡單に記して見ると、先づ花を摘み取り臼にてつきて小さき塊とする、これを餅紅と云ひます、此の餅紅を水中にて揉み潰して袋に入れ、搾りて紅花に含める黄色の物

質を除き、袋より出して藁灰汁の中にて數時間揉み、再び袋に入れて絞
り、その絞汁に焼梅の酢を加へて紅質を沈澱せしめる。此の沈澱物を正
味虹と申します。此の正味紅を羽二重の袋に入れて絞り、袋を通して出
たるものが即ち化粧紅なので、需要に應じて適宜の器に移して販賣する
のです。

藁灰汁は藁灰一升二合に水一升を加へ、よく攪拌して放置し、後ち上
清を取り水を加へて使用するのです。その割合は上清一升に付き三分の
一の清水を加へたるものを五百匁の餅紅に用ゆる。又、焼梅の酢は焼梅
の量に十分の八の水を加へて用ゆるのです。

結 論

化粧品の製造法は大略以上の通りである。

扱て吾人が結論として説かんと欲するは製品の販賣法で、こは實に本書
死活の問題である。されど紙數の都合上やむなく冊を改めて講述する事
にしたから、本書の讀等諸君は更に進んで第六編を熟讀せられん事を
すゝめする。

古き販賣法を改めて新らしき販賣術を斷行せよ。これ實に成功の秘訣
である。

化粧製品製造法
終

大正二年一月二十六日印刷
大正二年一月二十九日發行

○不許複製○

著者 實業研究會

右代表兼發行所 千葉縣君津郡久留里町上町四十九番地
大野平治

印刷者 吉岡之秀
東京市下谷區竹町十二番地(七號地)

印刷所 同 工會

發行所

千葉縣久留里町

博報館

(振替貯金口座番)
東京一〇九八九

270
659

弊店營業品

圖書藥品化粧品

乞御引立

終

